

「臨時災害放送局を利用した当院の活動報告」～病院ラジオ開局～

講師 福島県 公立岩瀬病院 主任 診療放射線技師 真船 浩一

このたびの東日本大震災により福島県民は地震、津波、原発事故、風評と四重の被害に苦しんでいる。当院のある福島県須賀川市は中通りのため津波の被害はなかったが地震の被害が甚大で当院の旧病棟および外来棟が使用不能となるなど、診療にも大きく影響した。それに加え東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴う住民の不安は日々増大する一方であった。身近に放射線について説明できる人は少なく事故直後からテレビ報道やインターネット等から情報を手に入れようとするも「安全」と「危険」という言葉が入り乱れ住民は何を信じたら良いか分からずますます混乱していた。

放射線管理士には「医療放射線管理」「医療被ばく低減・防護」「社会放射線管理」の 3 つの役割がある。特に「社会放射線管理」とは原子力災害が起きた際に活動を行う事が役割の一つだと私は認識している。その具体的な活動内容としては避難住民や汚染患者のスクリーニングサーベイの実施、病院スタッフや地域住民に放射線の情報提供、また放射線の不安や質問対応などがあげられる。当院では事故直後から放射線管理士が中心となり周辺の環境放射線測定を 1 日 3 回測定し院内の災害対策本部へ掲示した。また須賀川市の現状を正しく理解してもらおうと住民公開講座や院内勉強会、個人への放射線相談を行っていた。そんな状況の時、市内のボランティアが臨時災害放送局を開局することを知る。臨時災害放送局とは総務省の管轄でこのような災害が起きた際に地域の情報を発信するために特別に許可される FM である。この災害 FM の代表が当院の院長ということもあり院内にも臨時スタジオを作成し「病院ラジオ」をスタートすることとなった。「病院ラジオ」の内容は主に「放射線の不安に答える」「放射線の基礎知識」「内部被ばくについて」など放射線関連の話題を中心に放送した。原稿は放射線管理士が担当した。放送内容はメンバー内で毎日議論し決定した。毎日、原稿をあげるものの、ボツになった原稿も数多くあった。

放送は 6 月までの 2 ヶ月間であったが「遠くの専門家の話より身近な「病院ラジオ」の話聞いたほうが分かりやすい」「2 ヶ月で終わらないでほしい」などの声も多数寄せられ「病院ラジオ」そして放射線管理士としての役割を少しは果たせたのではないかと自負している。

福島では今、子供たちへの放射線教育をどのようにしていくか問題になっている。当院では病院ラジオが終了した現在、放射線管理士が「出前講座」として地域や小中学校に出向き「放射線の基礎知識」や「放射線被ばく対策」など講演している。まさに今、「放射線管理士」が活動する時だと私は思う。

最後に・・・今回、地元福島の放射線管理士の取り組みを紹介する機会を与えて頂いた神奈川県放射線管理士部会の皆様方には大変感謝しております。講習会も大変有意義でしたが懇親会の席での皆さまの闊達なお話もまた、これからの活動の励みになりました。ありがとうございました。これから「放射線管理士」がますます社会に貢献できる、必要とされる存在になれるよう努力して参りたいと思います。